



巻 頭 言

リスクコミュニケーションに想う

農 業 工 業 会 会 長 山 本 佳 彦

春爛漫、新緑がまばゆい季節となりました。今年は、気候温暖化のため、桜の開花も例年になく早く、いつになく慌ただしい花見でありました。緑にさそわれ野へ山へと足のおもむくこの頃です。

ところで、昨今、環境保全が声高に叫ばれております。なかでも、身近かな自然環境として、となりの里地、里山、水田、畑地等々に熱い目が注がれております。これら里山、早苗の植った水田、萱ぶき屋根、そして鶯の波に五月の薫風に元気に泳ぐ鯉幟。正に日本の原風景です。古里の何か甘酸っぱい、それでいて青臭い草息れが懐かしく蘇ってきます。これらは、特に、コンクリート建造物の中で日々大半を過ごす現代人の生活の反動としても強く心に訴えるものがあります。

このかけがえのない日本の原風景、それは、卯の花匂う里山があり、段々畑には節々の野菜が、水田には、水稻が作付られるなど、これら作物が活力いっぱいに生育し、近郷の農村は活気に満ちあふれています。この里山、田畑、村の風景は、いって見れば、農業が適正に営まれているからこそ守られる原風景なのです。適正な農業経営の営みこそが自然環境保全の原点です。農業は、元来、自然循環機能を最もよく活用している産業であるといわれており、それを人の手の営みで長年にわたり円滑に循環させて来たものであります。

それにもかかわらず、自然生態学者、環境保護主義者のなかには、「農業」は「自然」を破壊した。自然征服型農業はいけなない。果ては、「農業が悪い」といわれる方が多いようです。農業が適正な農業経営を営む上で果たしている役割は、作物の病害虫の防除による生産及び品質の向上のみならず雑草防除等による農作業の省力化等々でありことさら申し上げることもないと思っております。

これらの重要な役割を果たすため、農業には

4つの安全性が求められています。①は、使用者に対する安全性です。②は、使用する作物に対する安全性です。③は、生産された農作物に対する安全性です。残留農薬は、規定残留量以下でなければなりません。④は、周辺環境に対する安全性です。当然、現在、農薬登録され流通し使用されている農薬は、これら4つの安全性が全て確保されていますが、いまだに農薬は、悪いもの、危ないもの等の間違った考え方を持っている方も少なくありません。いうまでもなく、農薬の安全性については、農薬取締法に基づき最新の科学技術に基づいた多くの毒性試験等の実施が要求され、これらの試験結果からみて、安全性が確認された農薬のみが登録販売されています。

最近、このように農薬のような化学物質についてそのリスクとベネフィットについての正しい理解とその理解の上に立っての化学物質との共存のために、「リスクコミュニケーション」の必要性和重要性が提案されてきております。リスクコミュニケーションについては、関係者が相互に情報を要求、提供、説明し合い、意見交換を行って関係者全体が問題や行為に対して理解と信頼のレベルを上げて、リスク低減に役立てることを目的とするべきであるとされています。

また、リスク評価については、価値観に左右され、価値観を共有しなければ合意はありえず、科学的な証明で相手を納得させることはできないといわれています。

農薬の有用性を正しく理解してもらうためには、農薬を活用して営まれる農業の必要性、その農業の果している食料の安定供給、加えて農業の持つ多面的な機能の発揮等について広く理解して頂くことが必要なことでありますが、「食」と「農」の分離が進むこんにち、農業の必要性に深い理解を持ってもらうことは容易なことではないと思う今日この頃です。